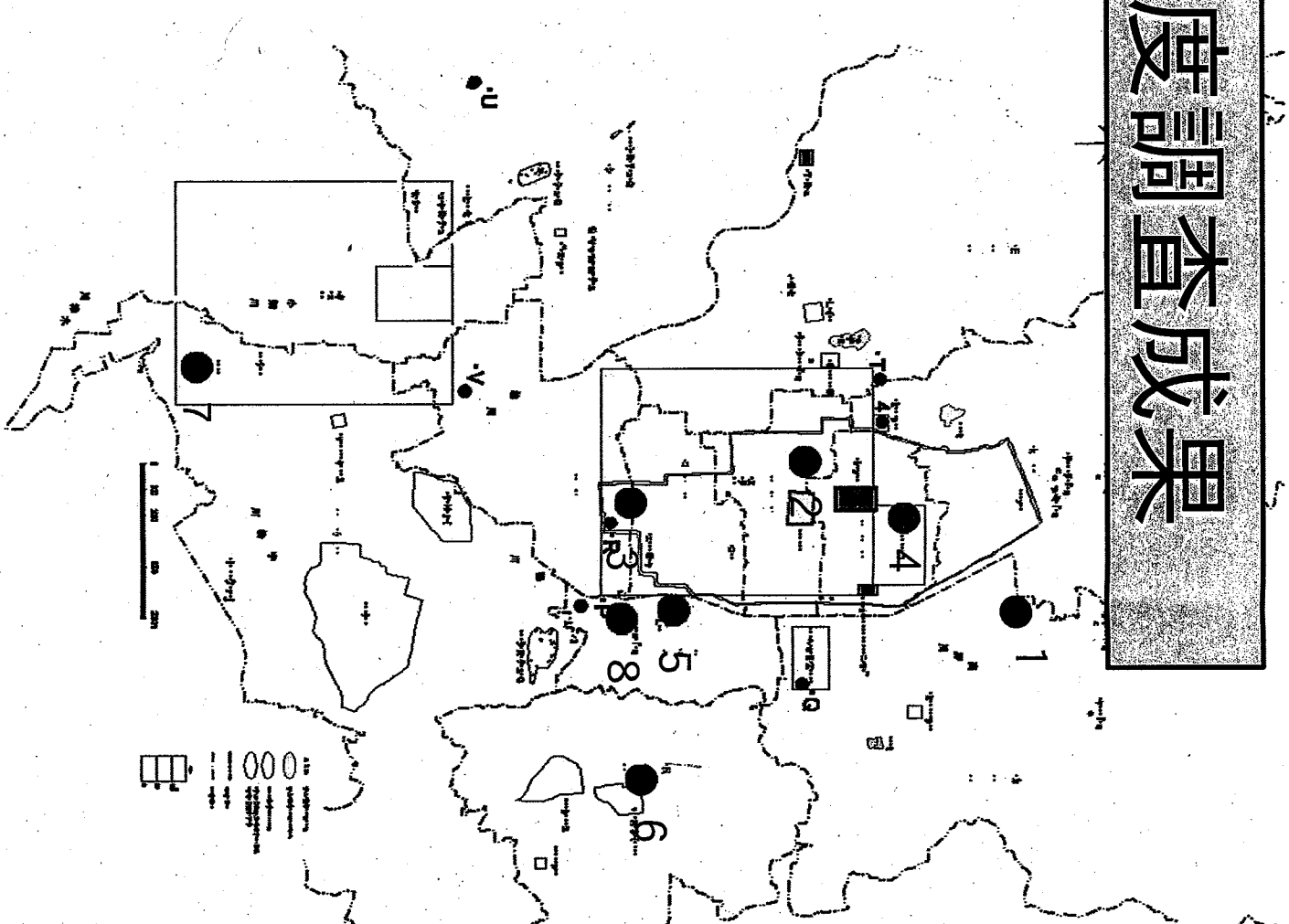


平成23年度調査成果

京都市考古資料館文化財講座資料
2011年3月24日

(財)京都市埋蔵文化財研究所
調査課長 吉崎 伸

- 1、植物園北遺跡
- 2、平安京右京三条一坊跡
- 3、教王護国寺境内（東寺）
- 4、上京遺跡
- 5、六波羅政庁・六波羅蜜寺跡
- 6、山科本願寺跡
- 7、淀城跡
- 8、法住寺殿跡



植物園北遺跡発掘調査現地公開資料

201年1月30日、12月1日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

はじめに

この調査は、学校法人ノートルダム女学院北山キャンパス総合整備計画に伴う埋蔵文化財発掘調査です。調査地は、縄文時代から中世にかけての集落遺跡である植物園北遺跡にあたっています。今回は、ノートルダム学院小学校北庭の一部と特別教室棟が建っていた箇所について約400平方メートルを対象にして調査を行います。

北山キャンパス内での主要な調査成果

1990年に行われた南側隣接地のユージニア館別館での調査では、古墳時代の竪穴住居跡を1棟見つけています。その中の1棟は火災にあっており、炭化した木材が多数出土しました。

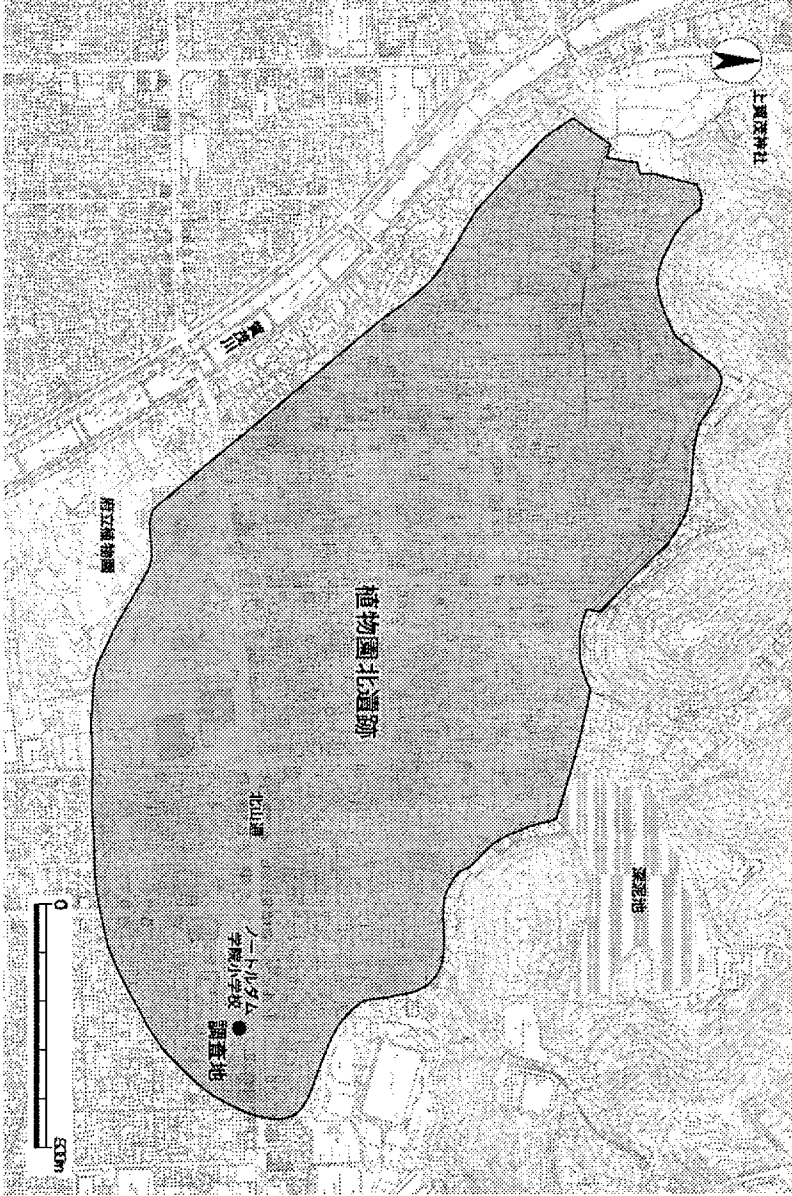
また、この春より行われた折りの森での調査（2区）では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡4棟を見つけました。その中の1棟は非常に大型で深く掘られていました。これも火災にあっていました。また、ユージニア館中庭での調査（4区）では、古墳時代の竪穴住居跡を2棟見つけ、ほぼ完全な形で葦が出土しました。

今回見つけた遺構

北庭区域では、遺跡は見つけることはできませんでしたが、特別教室棟のあった区域では、奈良時代の掘立柱建物跡を1棟、飛鳥時代と考えられる柱穴群、古墳時代後期の大きな土坑や粘土を貯蔵していたとみられる土坑、そして古墳時代前期の竪穴住居跡を見つけました。奈良時代の掘立柱建物跡は南北2間×東西2間以上の規模で、柱痕跡は径約25cmと大きく、かなり立派な建物であったようです。竪穴住居跡は今のところ5棟見つけています。中には、壁ぎわにベッド状の高まりを持つ住居がありました。植物園北遺跡で発見された中では、まだ2例目です。

まとめ

今回の調査では、古墳時代の集落が調査地付近まで広がっていたことがわかりました。また、古墳時代の竪穴住居跡の中には、ベッド状遺構を持つタイプのものがありません。奈良時代に入ってから、掘立柱建物が建てられていることから、周辺にはこれに関係した施設があった可能性があります。



植物園北遺跡の範囲と調査地（1：15,000）



5-3区ピット群（西から）



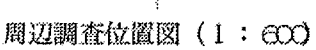
5-1区掘立柱建物跡（南から）

財)京都市埋蔵文化財研究所

2 遺構 建物SEO1・SEO2は2000年度に東西道路建設に伴う調査で検出し、今回両建物の北側柱筋を検出できました。SEO1は南北2間で東西6間(柱間は、南北11尺、東西10尺)、SEO2は南北2間で東西5間(柱間は南北9尺、東西8尺)の規模をもちます。建物2は南北2間、東西3間で柱間は8尺(約2.4m)ですが、2箇所の柱位置が検出できず、また溝229の真上に建つことから、やや特異な建物であったとみられます。建物3は北西部に散在する柱穴から想定しましたが、規模・構造は確定できていません。また池250の西岸には礎石2基と抜取穴らしき1基が南北に並んでおり、西側から池に張り出す建物が想定できます(建物4)。

3 出土遺物 池澤からは、土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などの他に、土製品（土錘）石製品（水晶製の軸端・基石、石帯、硯）、木製品（櫛・下駄・車輪形）、金属製品（銅鏃・鉄鏃・鉄釘・毛拔）、銭貨（長年大貫＝848年初鋳、陸益神貫＝859年初鋳、貞観永寶＝870初鋳）瓦類など、9世紀後半代の遺物が整理箱に約20箱出土しました。様々な種類が揃っており、高級陶磁器類が多いこと、仏器とみられる珍しい器形があること、墨書土器が多いことが特徴です。墨書土器では、土師器高杯に「三条院釣殿高杯」、別個体には「政所」と記したものがあり、当該地の邸宅名との関連で注目されます。

付ける成果としても注目されます。



四二条第
土に於て

藤原良相(一)
藤原氏に属する。八伯最朝の攝政大臣で藤原良
厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の
女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通
稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に
候したが、承和九年(二)の承和の変に際し
て、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺
を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納
低せられた。壽永二年(三)の初めに参議とな
り、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中
納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)
右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門
の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解
け広げると政治家として手腕を振るう一
方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の
一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜ
る。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ
春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年
十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上
表したが許されず、当時兼任していた空足卿
大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀
賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫
男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけ
たがその完成を見ないまま寿永五年十月十日
に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい
平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原
良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町
とするが、同書本文は「三条北朱雀」とい
し間に該当する。買花等とも称する。また
良相はこの第にて因んで西三条号する。眞
觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮よ
り当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌
年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また
同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、
桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せし
めてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く
不明。

西三条第さいさんだい
平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原
良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町
とするが、同書本文は「三条北朱雀」とい
し間に該当する。買花等とも称する。また
良相はこの第にて因んで西三条号する。眞
觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮よ
り当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌
年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また
同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、
桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せし
めてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く
不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけたがその完成を見ないまま寿永五年十月十日に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい

平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町とするが、同書本文は「三条北朱雀」といし間に該当する。買花等とも称する。また良相はこの第にて因んで西三条号する。眞觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮より当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけたがその完成を見ないまま寿永五年十月十日に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい

平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町とするが、同書本文は「三条北朱雀」といし間に該当する。買花等とも称する。また良相はこの第にて因んで西三条号する。眞觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮より当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけたがその完成を見ないまま寿永五年十月十日に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい

平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町とするが、同書本文は「三条北朱雀」といし間に該当する。買花等とも称する。また良相はこの第にて因んで西三条号する。眞觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮より当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけたがその完成を見ないまま寿永五年十月十日に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい

平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町とするが、同書本文は「三条北朱雀」といし間に該当する。買花等とも称する。また良相はこの第にて因んで西三条号する。眞觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮より当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿大符を解かれるのみであつた。在官中は「賀賀格式」の編纂に従事し、また兄弟防や伴孫男とともに「戦日本後紀」の撰纂も手かけたがその完成を見ないまま寿永五年十月十日に没した。贈正一位。

西三条第さいさんだい

平安京右京三条一坊六丁にあつた右大臣藤原良相の邸宅。但し、「経済抄」右京録には六町とするが、同書本文は「三条北朱雀」といし間に該当する。買花等とも称する。また良相はこの第にて因んで西三条号する。眞觀元年(七)四月、皇太后崩御皇子は東宮より当前に遷御、ほぼ一年間の摂政のうち、翌年四月に本邸の東五条第に移つてゐる。また同八年三月には、清和天皇が当地に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめてゐる。その後の当地の伝聞消息は全く不明。

藤原良相(一)

〔三ノミ〕平安京朝野群載

公卿。藤原氏に因る。八伯最朝の攝政大臣で藤原良厚は兄に因る。女の多可親字は次徳天皇の女阿多勢子は清和天皇の女御となつて通稱三条女院。仁明天皇に薨用されて宮中に候したが、承和九年(二)の承和の変に際して、空澄親王少将とて兵を率いて奥平山寺を寺崎。同十三年正月武烈皇后左近衛中納低せられた。壽永二年(三)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、奉寧大夫・權中納言、右近衛大將等を歴任、天安三年(五)右大臣に昇進した。貞観八年公家の源氏門の変に際しては、兄良房と水田下の争いを解き広げると政治家として手腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じ、昌治不能の一機子女のためには母命断絶の惨劇を生ぜる。その扶養助成に意を用いた。度嵐が立つ春に雲丹民改に尽力しなと称され、貞観八年十二月、儒術と出家を理由に職を辞する旨上表したが許されず、当時兼任していた空足卿

『平安時代史事典』 本編下 角川書店 平成6年

三代實錄卷四 清和天皇(寶龜二年四月)

五〇

錄言上自今以後永爲義舉以爲國新也。○廿二日壬寅地震。○廿四日甲辰從五位下藤原朝臣馬能子授從四位下。无位藤原朝臣度茂子從五位下。○廿五日己巳。皇太后遷自右大臣西京第御東五條宮。授從五位上行右近衛權少將兼國防權守藤原朝臣常行正五位下。常行。右大臣之第一男也。新錄印一而賜尾張國。○廿九日己酉晚。設齋寶祚仁王經。起自京師。爰及諸國。詔百高班駕咒願文曰。實知。玄大安寺僧傳燈法師位一如於筑前筑後豐前豐後肥前肥後等國諸神社續經。○廿一日丁酉。頒額。○廿三日己亥。覺興幸右大臣藤原朝臣良相西京第觀櫻花。晚文人賦百花亭詩。演席者卅八四位四人五位八人六位廿八人。天皇御射庭賜親王以下侍從以上射。左右近衛中少將預貲。中鴻耆賜布。俗官奏樂。女藝稚稚十二人退出而舞。晚奏女樂歡宴竟日。賜應從百官祿各有差。夜分之後樂興還宮。是日進參議右大弁從四位上兼行播磨權守大枝朝臣重人參議右近衛權中將從兼備前權守藤原朝臣常行參議左近衛中將兼伊豫守藤原朝臣基經南並加正四位下授從五位上行納言兼從後藤原朝臣諸葛正五位下從五位下左兵衛權佐藤原朝臣直方從五位上散位正六位上大枝朝臣氏雄木工少允從七位下布勢朝臣具繼並從五位下外從五位下伊勢朝臣善子從五位下已上散位並是實餘之殊弊也。○廿八日甲辰。甲斐國從五位上勳十二等物部神美和神並授正五位下從五位下守波刀神從五位上。大和國示城京內田地十六町三段百廿步。賜從四位下行山城權守在廣朝臣善嗣。先是善淵奏言奉爲平城木上天皇建精舍於陵次。買得舊京荒地。聖嗣爲田充修理精舍之資。而內藏寮稱格旨收爲勅旨田請願恩許永爲私田詔許之。○閏三月丙午朔。覺興幸太政大臣東京殿殿。觀櫻花王公已下及百官扈從。天皇御釣鐘觀釣魚還射殿。御弓矢王公已下以次射。御東門觀新田農夫田獵。樂樂作還御望遠亭觀歌

三代實錄卷十二 清和天皇(寶龜二年三月)

二八〇

花樹俗人陪於歌樹鼓鐘條隔絲竹繁會童男妓女花間送舞喚能屬文者數人。偶落花無數雪詩彩日樂飲皇歡是洽群臣具酌宴竟親王已下五位已上及六府將監尉已下賜祿各有差五位已上未得解由者預貲日事軍駕還宮。是日召集京城貧窮者於鴨河邊以新錢五萬文飯二千五百錢頒給焉於近京郡三之寺轉讀金剛般若經繞若心經。○五日庚戌地震。授近江國正六位上天社從五位下加賀國司

三代實錄卷二 清和天皇貞觀元年四月

開元之所宜其改天三年以爲貞觀元年將使皇祚正一被群品以用全實曆延長均兩儀以年遠亡是日神祇官卜以參河國播豆郡爲悠紀美作國美多郡爲主基○十八日癸卯皇太后遷自東宮御右大臣西京二條第去年八月廿九日与今上同輿遷自冷然院御於東宮難造五條宮暫御大臣第爲避忌也進恭讓從三位右皇太后宮大夫仲宿恭善男階加正三位夷從五位下三統宿稱眞淨從五位上外從五位下行大通御船宿祢彥主從五位下上緣皇太后御願置安祥等年分度者三人順文曰竊以

二四

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

上京遺跡 発掘調査 現地公開資料

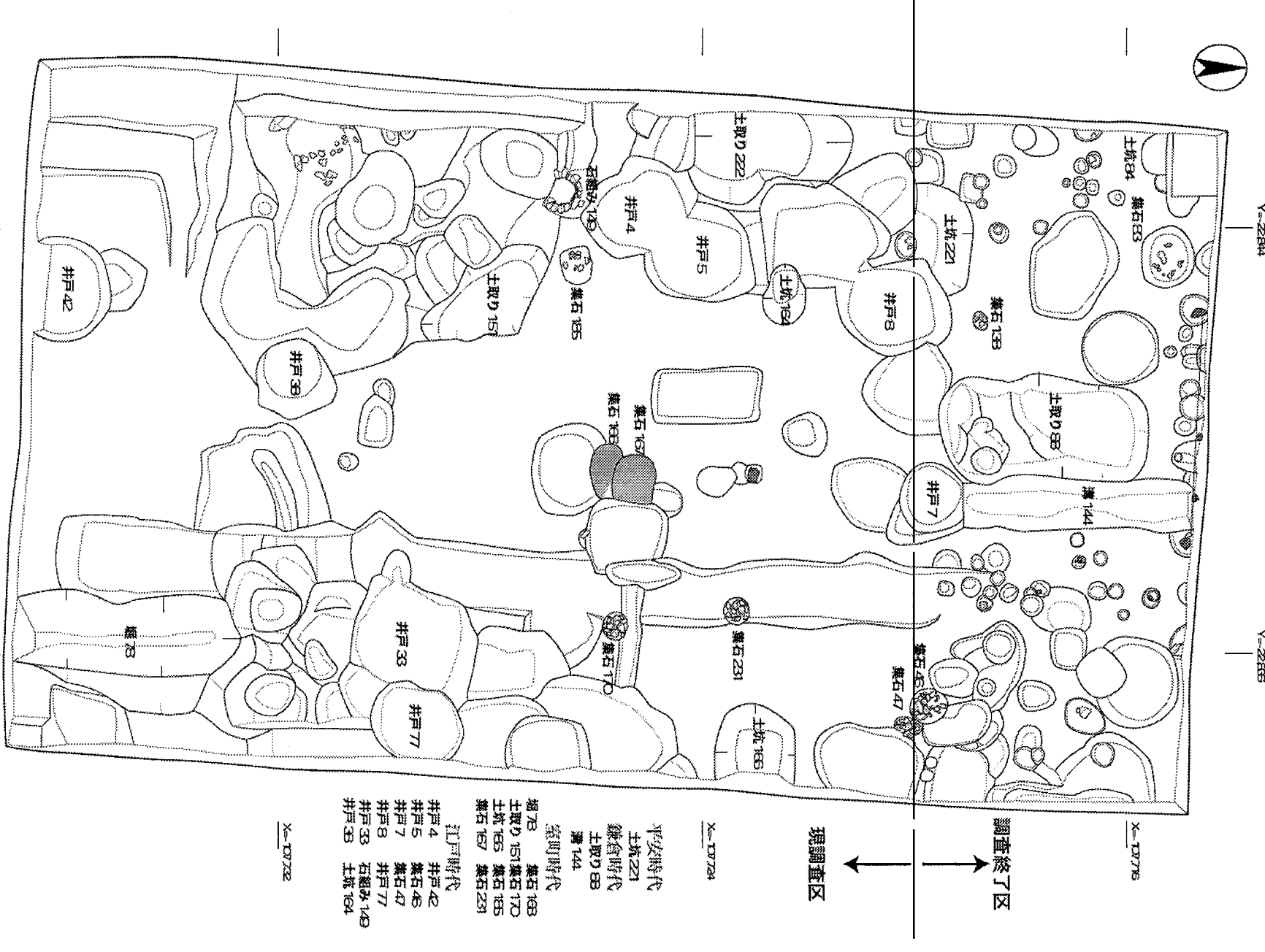
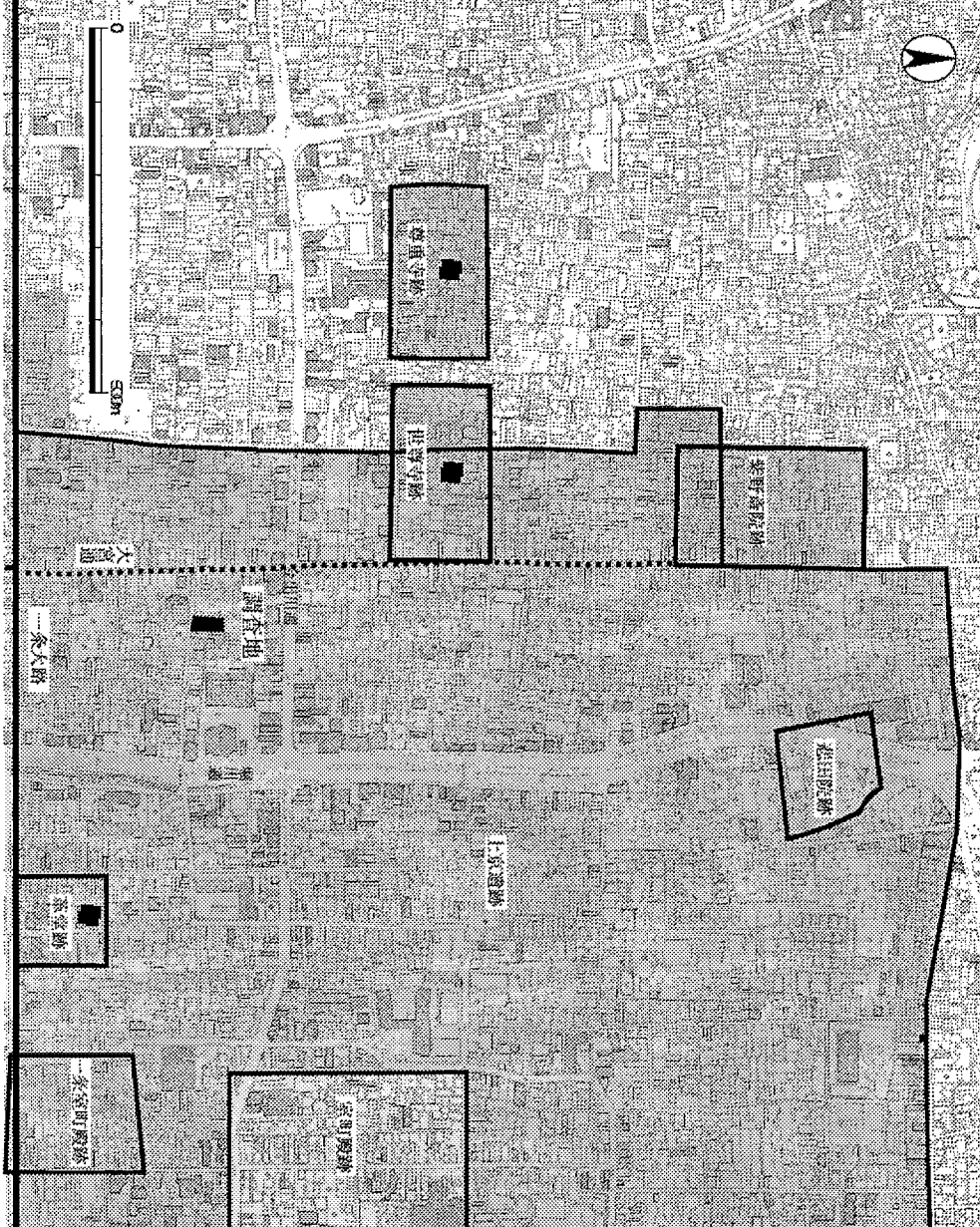
平成23年6月18日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
<http://www.kyob-arc.or.jp/>

- 1：所在地 京都市上京区元誓願寺通大宮東入寺今町513
- 2：調査期間 2011年4月25日～2011年6月24日
- 3：調査面積 約300㎡
- 4：調査目的 上京遺跡は室町時代に室町御所を中心に公家や武家屋敷、寺院などが造営され、周辺に市街地が形成された都市遺跡です。調査地は、上京遺跡の西南にあたり、平安京左京の北郊に位置します。試験掘調査で室町時代以降の遺構が良好に遺存していることが明らかとなり、発掘調査を実施しています。

- 5：調査成果
主な遺構
：平安時代 土坑
鎌倉時代 ヒット・土取り穴・土坑
室町時代 ヒット・土取り穴・土坑・溝・堀・集石
江戸時代 井戸・集石・土坑

主な遺物
：平安時代 土御器・緑釉陶器
鎌倉時代 土御器・焼陶器・輸入陶磁器・銭・石製品
室町時代 土御器・焼陶器・輸入陶磁器・瓦質土器・施釉陶器・銭
江戸時代 土御器・施釉陶器・染付



遺構実測図 (1:100)

元六原小学校発掘調査説明会資料

201年8月20日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

遺跡名：六波羅政庁跡・六波羅蜜寺境内

所在地：京都市東山区松原通大和路東入2丁目輦輦町82 (元京都市立六原小学校内)

調査期間：2014年6月13日～9月上旬 (予定)

調査面積：約500㎡

1 はじめに

今回の調査は、元六原小学校内での、京都市立開晴小・中学校第2校舎新築工事に伴う発掘調査です。調査地は六波羅政庁跡・六波羅蜜寺境内にあたっています。

六波羅蜜寺は、応和3年(963)空也上人が鴨川の東に御堂を建立し、西光寺と呼んだのをはじめとします。空也上人の没後、六波羅蜜寺と名が改められました。六波羅政庁跡は、平安時代後期には平家一門の六波羅邸があったところで、文治元年(1185)壇の浦の合戦で平家滅亡後、跡地を源頼朝が接収し、北条氏が鎌倉幕府の政庁(六波羅探題)を設けました。

2 見つかった遺構

調査では室町時代の遺構が見つかっており、門跡・築地(堀)・柱穴・溝・土坑などがあります。

調査区の東側では門跡と門に取り付け東西方向の築地跡、同じく東西方向の溝が2条見つかりました。門跡には左右それぞれ3つの礎石が据えられており、中央が門の親柱、前後が支柱のものです(四脚門)。門に取り付け築地跡は、ほとんど痕跡をとどめていませんが、わずかに高みとして残っています。築地の南側(内側)には並行して溝が設けられています。この溝は門の部分が途切れており、とくに東側の溝は門の部分で南に曲がっており、この部分が通路となっていたことがわかります。

一方、調査区の西側は西に下がる斜面となります。自然地形の急な斜面を東側から埋め立て、高台の平坦面を拡張した様子がうかがえます。また、高台の端には南北方向の堀が掘られています。堀は断面がV字をなし、深さ約1.2mもある深いものです。一般に「築堀堀」とよばれる防御用の堀と考えられます。

その他に土坑(穴)が多数あり、瓦器の銅や釜などが埋納されているものが多いことから、中世の墓跡と考えられます。

3 まとめ

今回の調査地である六原小学校は、明治5年(1872)に六波羅蜜寺境内の一部に建てられました。したがって、今回検出した遺構の多くは、六波羅蜜寺にかかわる遺構であると考えられます。

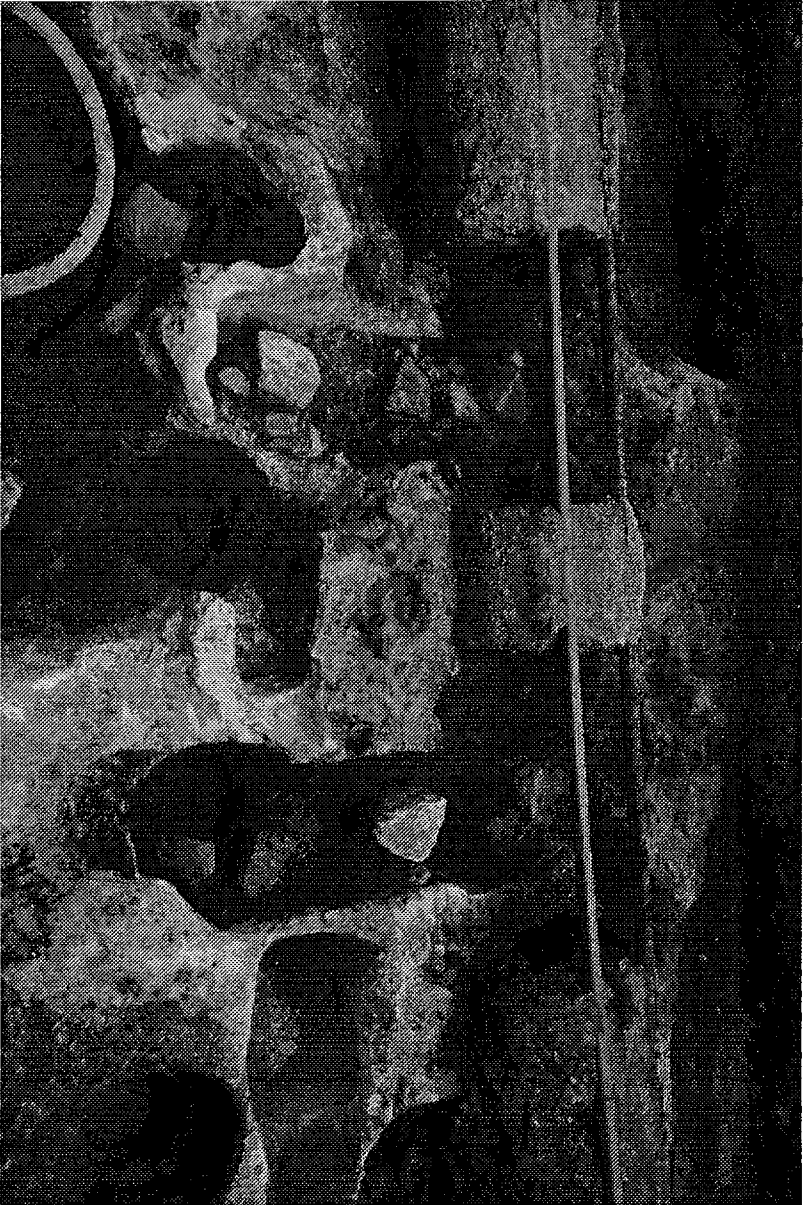
とくに調査区の東部で検出した東西方向の築地跡や溝跡は、門から境内への導線が六波羅蜜寺本堂の西端とほぼ一致していることから、六波羅蜜寺の北限を示す遺構であると考えられます。

また、西側の堀(堀135)は、北端が築地の部分で東側に屈曲していることから、築地に関係した遺構とみられます。この堀の西側は西に落ちる崖面となるため、六波羅蜜寺の西端を限る堀を検出したものと考えています。

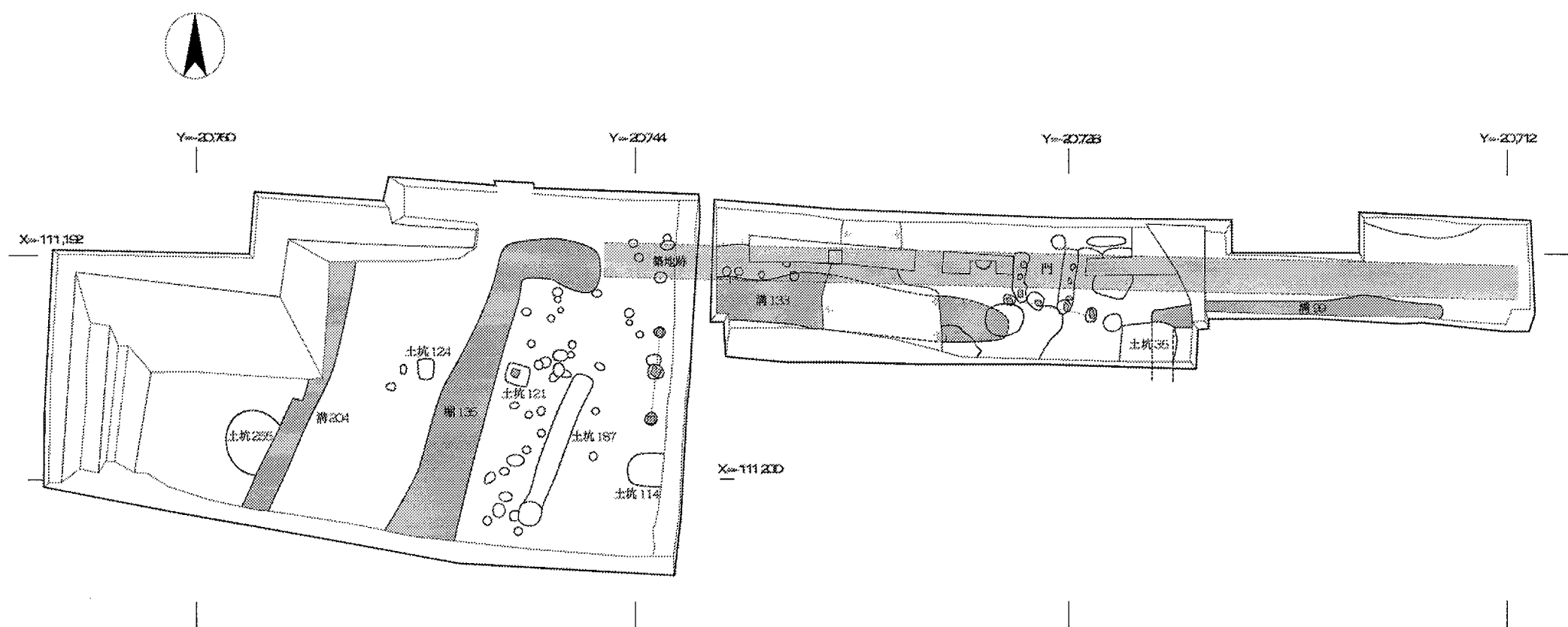
以上のとおり、今回の調査では室町時代の六波羅蜜寺境内の北西隅を調査し、寺域の北限と西限の位置を確定できる成果となりました。



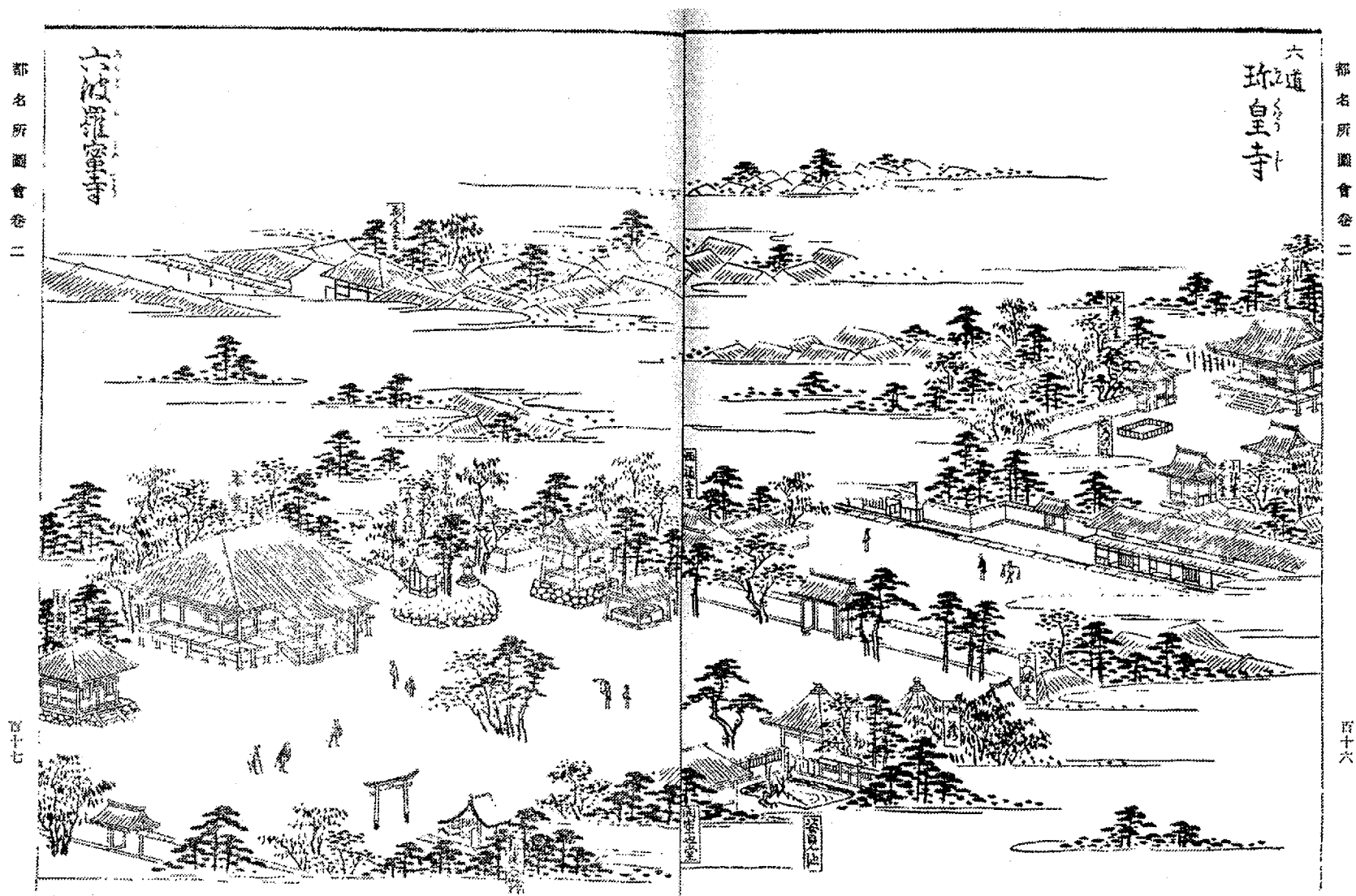
堀 135 (南から)



門跡 (南から)



遺構平面概略図（1：200）



『都名所図会』（1780）に描かれた六波羅蜜寺（東南から見た図）

山科本願寺跡発掘調査現地説明会資料

201年9月10日

調査地：京都市山科区西野山階町地内
調査期間：201年7月21日～201年9月下旬（予定）
調査主体：財団法人京都市埋蔵文化財研究所 <http://www.kyoto-arc.or.jp/>

遺跡の概要

山科本願寺は、文明10年（1478）浄土真宗中興の祖・蓮如上人により造営が開始されました。寺域は堀と土塁で囲まれ、主要堂舎の建ち並ぶ「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住区のある「外寺内」の三つの郭で構成され、壮大な規模を誇っていました。寺内町の経済的な発展にも支えられ、將軍家や有力武家をしのぐほど繁栄しましたが、天文元年（1532）に管領細川晴元率いる近江守護職六角定頼と法華宗・延暦寺の連合軍によって攻撃され、焼け落ちました。

今回の調査は、山科本願寺跡の16次調査になります。当地が「御本寺」の中心部に近い場所にあたることから、昨年度に引き続き、遺構の有無を確認するための調査を行っています。

見つかった遺構

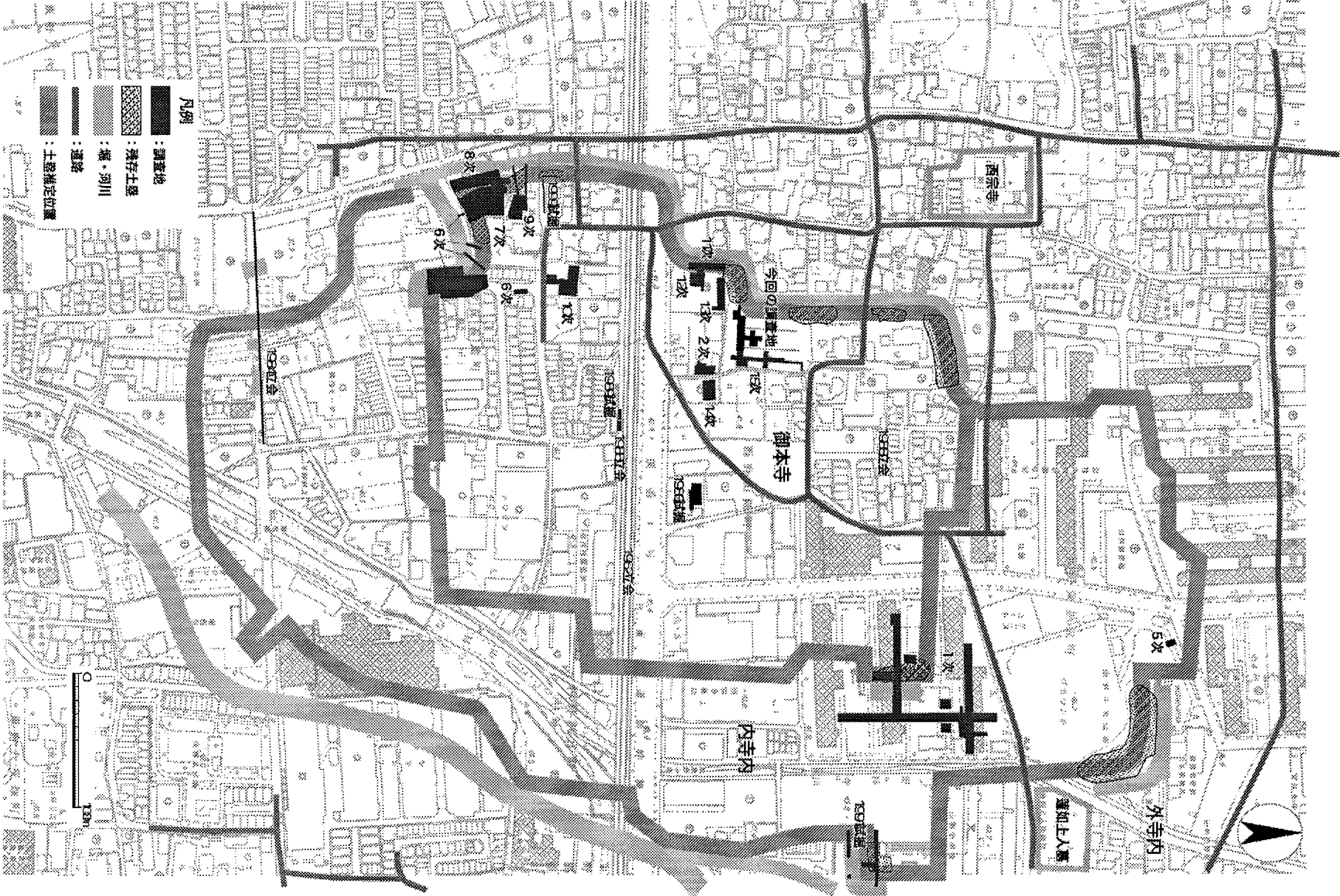
土塁 調査地の西側には、「御本寺」を囲う土塁と堀が現存しています。現状で幅約14m、高さは堀の底から約6.5mあります。断面が露出しており、土の盛り方が良くわかります。調査区西側では屈曲する土塁の裾部が見つかりました。裾部には、幅1～1.5m、深さ約0.2mの溝1が巡ります。溝1には多量の土器類が投棄されていました。

通路状遺構 調査区東側では、15次調査で見つかった通路状遺構と柱列1・2の延長部分が見つかりました。調査区の中央付近で南に屈曲しており、16次調査で見つかった南東に位置する建物群を囲う施設の可能性があります。

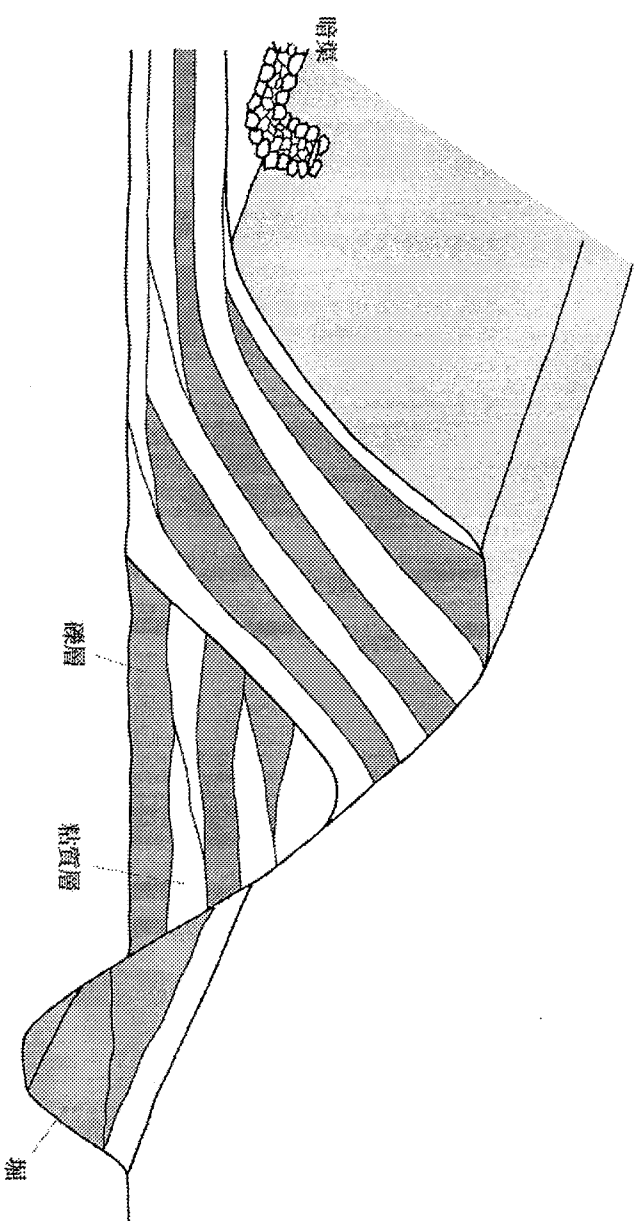
石組み溝 調査区北側では、石組みの溝2が見つかりました。検出した長さは約14m、溝の幅は約1m、深さは0.1～0.3mあります。この溝は、部分的に石の用い方に変化が見られること、屈曲あるいは斜行することなどから、景観を意識した庭の一部と考えられます。周囲には柱列3や礎石などが点在することから、建物と建物の間の坪庭風の空間であったと推測されます。

まとめ

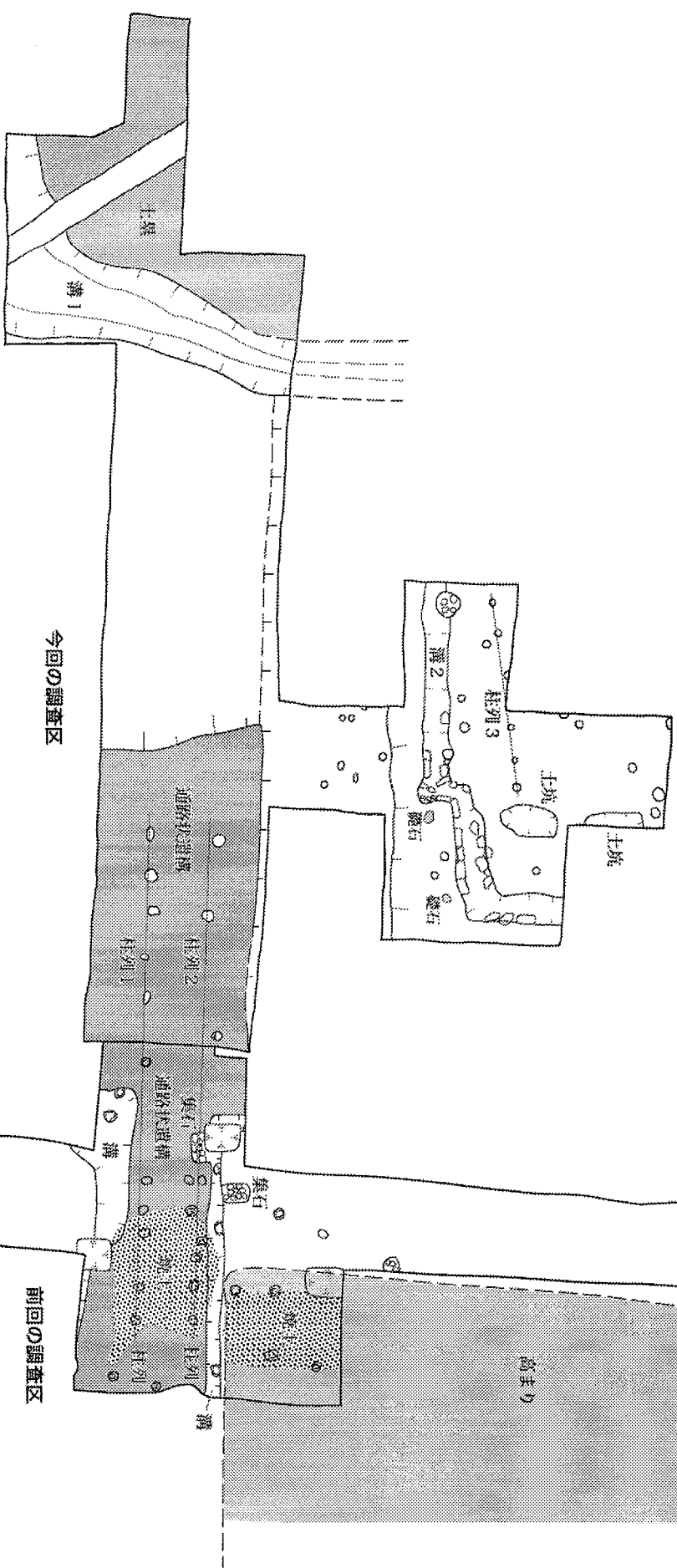
現存する山科本願寺の土塁は数少なく、今回の調査で土塁裾部が良好に残存していることがわかったことは大きな成果です。また、今回見つかった坪庭風の空間は、現在の西本願寺の堂舎配置を参考にすれば、阿弥陀堂や御影堂の裏手に存在する書院のような建物群に関連する可能性が高いと言えます。過去の調査成果を含め、「御本寺」内部の空間の使われ方が次第に明らかになってきました。今後の阿弥陀堂跡や御影堂跡の発見に向けた大きな手がかりとなる成果と言えます。



既往調査位置図（1：4000）



土塁断面模式図



遺構平面図 (1 : 200)



— X-112922

— X-112933

— X-112938

— X-112916

— X-112934

— X-112932



淀城跡発掘調査現地説明会資料

201年11月6日

財)京都市埋蔵文化財研究所

調査期間：201年9月20日～12月28日(予定)

調査地：京都市伏見区淀池上町他地内

はじめに

この調査は、京阪電鉄淀駅の高架化に伴って1999年より断続的に行ってきた発掘調査の9次調査にあたります。これまでの調査により、主に江戸時代の淀城に関する石垣や堀・建物などのほか、それに先行する桃山時代の町屋や大坂街道などに関する建物や溝・道路などの遺構が見つかっています。本調査でも同様な遺構が見つかりました。

淀地域に関する主な出来事(表1参照)

淀は、古くは宇治川・木津川・桂川・鴨川の四川と巨椋池の結節点にあたり、水陸交通の要衝の地でした。平安時代には「与度津」と呼ばれ、都の港として機能したと考えられます。

また、室町時代には山城守護代の守護所が置かれ、のち現在の納所辺りに淀古城が築かれます。豊臣秀吉が天下を統一した後に、愛妾の茶々が産所として入城し、のちに淀殿と呼ばれたことはあまりにも有名です。この淀古城も、文禄3年(1594)には伏見城の築造が計画されたことに伴って、破却されます。この時、淀堤が造られて、津としての機能も失われてしまいました。

江戸時代に入ると、先の伏見城の廃城が決められ、再び淀に京都守護の城として、松平定綱によって淀城が築造されます。これが現在も残る淀本町の淀城です。宝暦6年(1756)落雷によって天守を始め大半の建物が焼失してしまい、その後再建されなかったようです。さらに、慶応4年(1868)の鳥羽伏見の戦いの際には、城下町も戦火に見舞われ炎上しました。明治維新後、淀藩の廃藩に伴い、廃城となりました。

これまでに行った主な発掘調査(表2参照)

これまでに淀周辺で行われた主な発掘調査は、表2と図2に示しました。本丸周辺・南曲輪・東曲輪などで単発的に行われた調査1～7と、今回の京阪淀駅の高架化事業に伴って1999年より東曲輪の北西一中堀一内堀南東部一南曲輪一中堀一内高嶋一外堀にわたって、淀城を北東から南西に縦断する形で調査を行った1～9次調査があります。これらの調査では、主に今も本丸・天守台や堀の残る江戸時代前期(およそ400年前)の淀城に関する遺構(淀城期)と、それ以前の桃山時代の大坂街道やこれに沿った町屋などに関する遺構(淀城以前)の2つの時代の遺構や遺物が見つかっています。そのほか具体的な遺構は見つかっていませんが、もっと古い平安時代や中世の土器なども見つかっています。

なお、6・7・9次調査では高架化工事の工事区にあわせて、調査区をA1・2区、B1～5区、C1～3区と呼んでいます。

淀城期(江戸時代前期以降)の遺構

淀駅周辺整備に伴う発掘調査ではありませんが、現存している本丸・天守台で発掘調査が行われ、天守台の地下が石蔵となっていたことがわかりました(調査1)。また、本丸と二ノ丸の間では、その境界を示すとみられる石垣(調査4)。本丸北東隅では隅櫓に昇るための石組の階段(調査7)を見つけています。

本丸の東、東曲輪では北端部分の調査が進んでおり、溝に栗石を詰め込んだ長大な布堀基礎や柱を受ける礎石の根石などが見つかっており、絵図などにみられる米蔵の基礎と考えられます(調査6、2次・3次調査)。このほか、この米蔵などを囲う施設である石垣や溝、前面に広がる路面状の整地などがあります(C1・C2区)。

本丸の南、南曲輪でも東曲輪同様の米蔵などの蔵の基礎とみられる布堀基礎と礎石根石、北面する石垣などが見つかりました(B2区)。

また、各調査区で堀とその石垣が見つかっています。東曲輪北側の外堀(C3区)と南辺石垣(8次調査)。本丸東の中堀と東辺石垣(C3区)・西辺石垣(B5区)。本丸南東部の内堀と東辺石垣(B4区)・南辺石垣(B3区)。南曲輪南の中堀と北辺石垣(B1区)。さらに南の外堀(A1区)などです。いずれも、明治以降に石垣は壊され、堀は埋められています。

淀城以前(桃山時代)の遺構

淀城が築城される以前のこの地域には、京都と大坂を結ぶ大坂街道の両側に、町屋が広がっていたと考えられます。調査では、C1区とC2区の間を南北に通る大坂街道の路面、その両側には、道路に面して直交する地割りによって家々が並んでいた様子がわかっています。あまり時間差のない間に、同じ場所で何度もかさ上げがされて、その度に同じような地割りがなされて、路面と町屋がみつかります。洪水などで埋まる度に、何度も復興されたことがわかります。

まとめ

淀城期の遺構は、主に堀やそれに伴う石垣、蔵の基礎と考えられる布堀基礎、礎石やその根国跡などがあり、江戸時代に描かれた絵図などの状況と一致していると言えます。これらの遺構は、深い堀を掘って、築城以前の町屋などの遺構の上に厚い砂による盛土を行って構築されています。

一方、淀城以前の町屋遺構は、大坂街道の両側を中心に見つかっており、あまり広い範囲には展開しないようです。

表 1 淀地域に関する主な出来事

	西暦	和暦	主なできごと
平安	804	延暦 23	桓武天皇、「与渡津」に行幸（『日本後期』）
	810	大同 5	藤子の変に際し、「与渡市津」に兵を置く（『日本紀略』）
	874	貞観 16	「与渡渡口」の三〇数件が洪水で流された（『日本三代実録』）
	1183	文治 4	淀の「魚市」、初めて文獻上に登場（『玉葉』）
	1418	応永 25	一色義賢の山城守護代三方範忠、淀納所を守護所とする
室町	1428	正長 1	山城守護島山満家、淀を下五郡の守護所として守護代を置く
	1504	永正 11	摂津国守護代薬師寺元一が淀城を占拠、細川政元に謀反を起こす（『細川両家記』）
	1558	永祿 2	8月 管領細川氏綱が淀城に入城（『細川両家記』ほか）
	1572	元亀 3	7月 淀城の岩成友通、織田信長の攻撃を受け、敗北
	1582	天正 10	6月 山崎の戦いで、淀城は明智光秀側の砦となる（『兼見卿記』）
安土・桃山	1588	天正 17	1月 豊臣秀吉、愛妾茶々（淀殿）の産所に淀城をあて、豊臣秀長が細川忠興の補佐により修築
			2月 江北から人夫徴発し、石垣工事がなされる
			3月 淀殿、入城
			5月 淀殿、秀吉の子寒（鶴松）を出産
			9月 鶴松、大坂城に移る
淀城（淀本町）	1594	文祿 3	3月 伏見城築造の計画に伴い淀城が破壊される。周辺が淀堤により開墾され、津としての機能も失う
	1623	元和 9	7月 徳川家光、伏見城で将軍職拜任、伏見城廃城
			8月 徳川秀忠、松平定綱に京都守護の城として、淀城の築造を命じる。二条城の天守が淀城の天守として移築される
			淀城竣工。松平定綱、3万5千石で入城
			松平定綱備中国へ移封、永井尚政は10万石で入封
淀城（淀本町）	1637	寛永 14	永井尚政、木津川付け替え工事に着手
	1638	寛永 15	木津川付け替え工事竣工し、城下町が拡張する
	1668	寛文 9	石川憲之入封
	1711	正徳 1	戸田光熙入封
	1717	享保 2	松平乗邑入封
江戸	1723	享保 8	稲葉正知入封、このち代々稲葉氏が城主
	1756	宝暦 6	洛雷により、天守や大半の建物が焼失
	1868	慶応 4	1月 鳥羽伏見の戦いの戦火により城下町が炎上
	1872	明治 4	淀藩の廃藩に伴い、廃城
	1874	明治 7	淀城石垣解体始まる

表 2 これまでに行った主な発掘調査

	調査年度	調査機関	見つかった主な遺構
調査 1	発掘 1987年	淀城跡調査団	天守台の発掘調査。天守台の地下が石蔵となっていたことが判明。
調査 2	試掘 2003年	京市埋せ	南曲輪の建物や堀に伴う石垣、内高輪北側の中堀南側の石垣、天守台南の内堀の南側の石垣裏込めなど。
調査 3	試掘 1990年	京市埋研	南曲輪の南の中堀北側の石垣。
調査 4	試掘 1994年	京市埋せ	本丸と二ノ丸の間で、境界を示すと考えられる石垣。
調査 5	試掘 1976年		二ノ丸西側の内堀東側の石垣。
調査 6	発掘 2003年	京市埋研	東曲輪の北端で米蔵の基礎。
調査 7	試掘 2008年	京市埋せ	本丸隅櫓の石組みの階段。
1次調査	発掘 1993年	京市埋研	淀城北側、湿地状堆積。
2次調査	発掘 2003年	京市埋研	東曲輪の北端、調査6と同じ米蔵の基礎の南西角、屋敷地境界を示す石列など。
3次調査	発掘 2004年	京市埋研	東曲輪の北端、調査6と同じ米蔵の基礎の西端。
4次調査	発掘 2003年	京市埋研	東曲輪、3次調査と同じ屋敷地の境界の石列や井戸など。
5次調査	発掘 2009年	京市埋研	東曲輪の空閑地、路面状の整地。
6次調査	発掘 2009年	京市埋研	東曲輪の北西一中堀一中堀一内堀南東部一南曲輪一中堀一内高輪一外堀
7次調査	発掘 2010年	京市埋研	東曲輪の北西一中堀一内堀南東部一南曲輪一中堀一内高輪一外堀
8次調査	発掘 2010年	京市埋研	東曲輪北端、北側の外堀の南側の石垣、その南の路面や石垣。下層では、淀城築城以前の太坂街道の路面・縁石、面する敷地の建物など
9次調査	発掘	本調査	東曲輪の北西一中堀一中堀一内堀南東部一南曲輪一中堀一内高輪一外堀

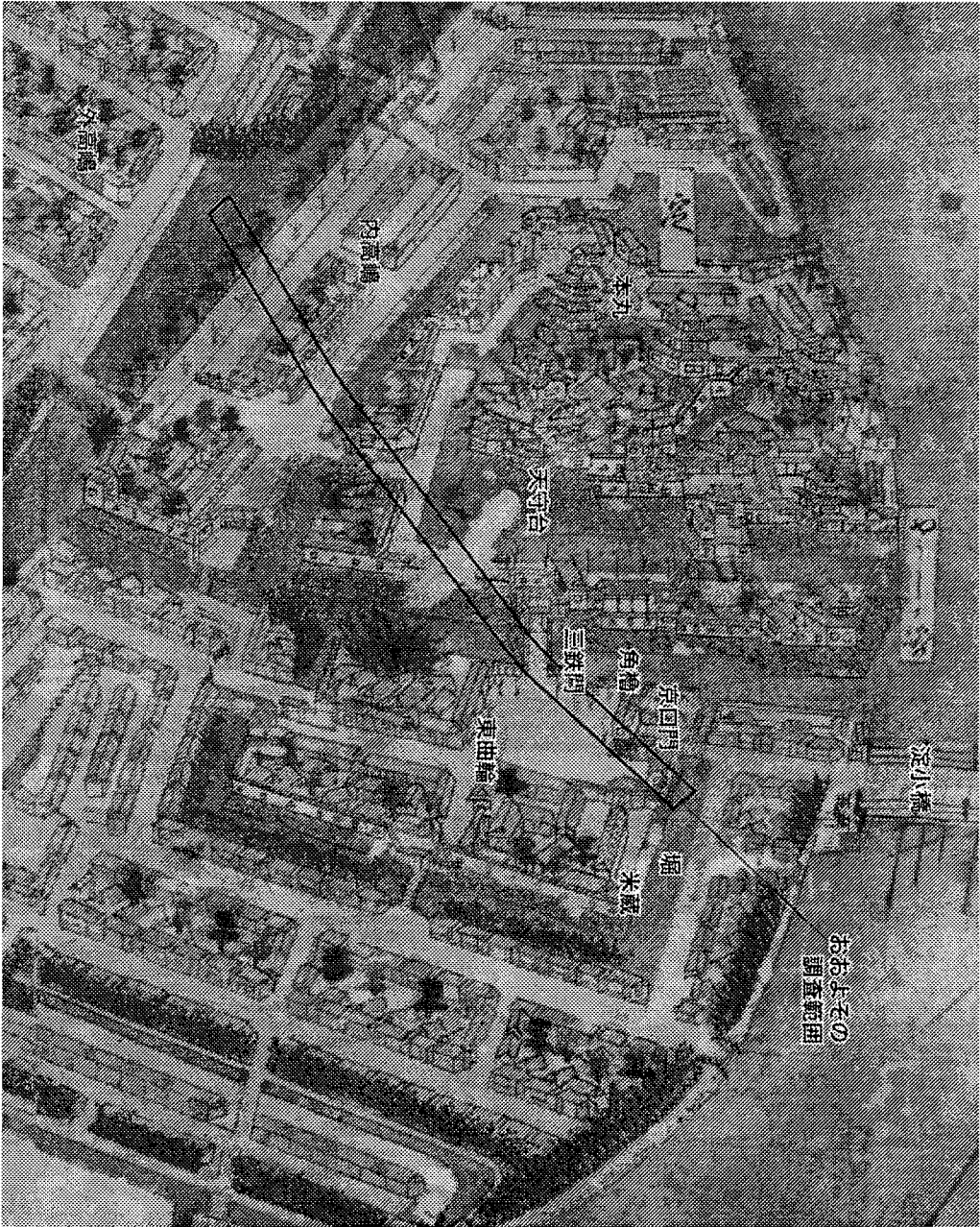


図 1 絵図に置ける調査位置図（『笹井家本 洛外図屏風（淀城下部分）』、高槻市しるあと歴史館蔵に加筆）

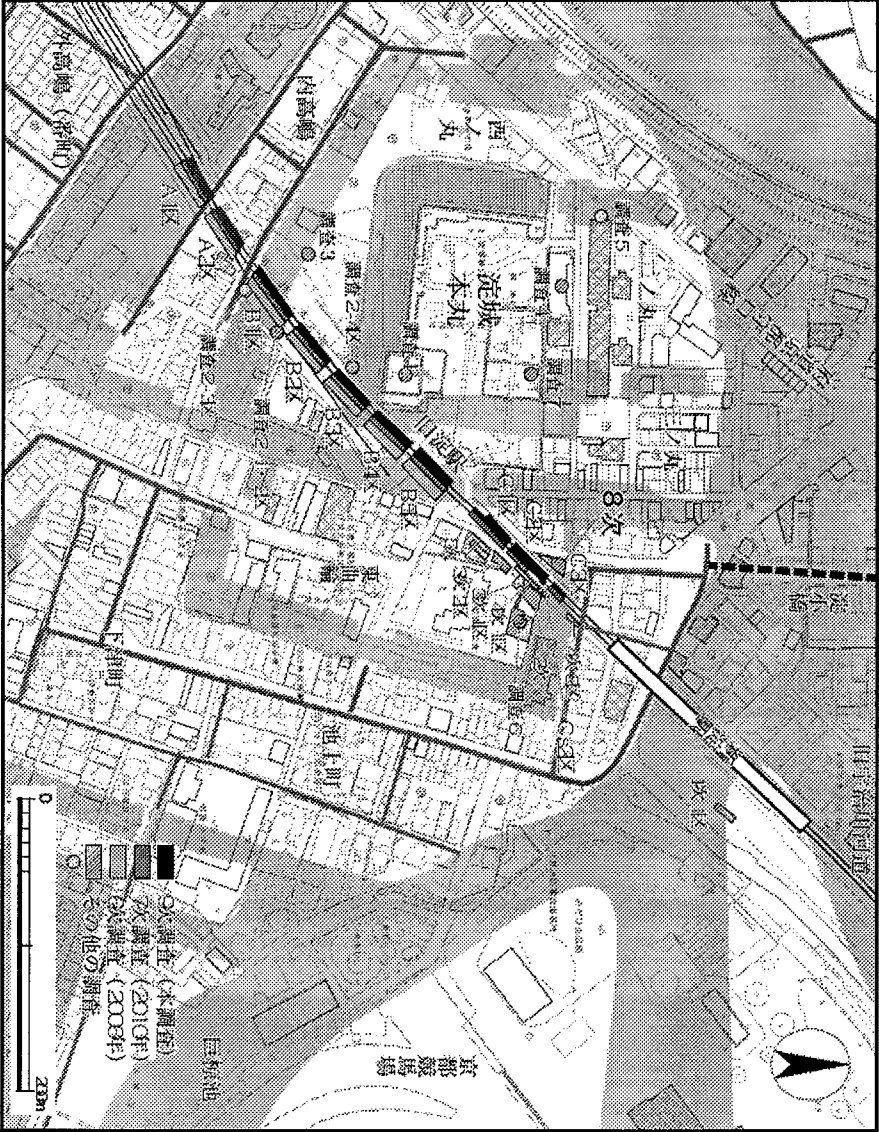


図 2 淀城下町復元図および周辺調査地点図（1：5000）